



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第13回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

信仰なくして平等なし

昨年四月に一年のつもりでお引き受けしたこのコラムですが、もう一年だけおつきあいをいただくとことになりました。よろしくお願いをいたします。この一年に、読者の方々から直接間接に多くの反響をいただきましたこと感謝します。もし、いつかこんなことを取り上げてほしい、というご要望がありましたら、参考にさせていただきますので、編集部宛にお知らせください（といっても、もちろん

できないことの方が多いと思いますけど。餅屋にパンは焼けません）。

さて、四月になると、人々の移動や異動があります。晴れて希望の道へと進んだ人もあれば、そうでない人もあるでしょう。何かと自分と他人を引き比べてしまう機会の多い季節です。そんな時に考えるのは、人間って本当に平等なのだろうか、という問いです。

誰でも冷静にまわりを見回してみれば、人間はけっして平等ではない、ということがわかります。生まれながらに与えられているものも、それを育て伸ばしてゆく環境も、はなはだ不平等です。ホリエモン株の乱高下が象徴的に示してくれたように、日本も「一億総中流」から「格差社会」に変わりつつあります。

人間の所与や境遇が不平等である、ということとは、「平等」を論じたギリシアの人々にとって、まったく自明のことでありました。

人間は、自然においては不平等である。だから、法律によって人為的に平等をつくり出す政治制度が必要だったので。

平等は、市民の政治的な領域にだけ存在するものでした。ところが、近代になると、この理解は逆転します。つまり、人間は本来、生まれながらに平等なのだが、それが社会制度のせいで不平等になっているのだ、という理解です。だから、革命によって本来の平等を取り戻そう、という主張が出てまいります。

アメリカ「革命」の「独立宣言」には、「すべての人は平等に創られた」とあります。アメリカ人なら誰もが口にするこの言葉はしかし、あるがままの現実を写し取ったものではありません。この言葉が書かれた当時、「すべての人」の中には、黒人も女性も入っておりませんでした。起草者のジェファソンも、奴隷を使用する大プランテーションをもっておりまして、奴隷である女性との性関

わたしたちの経験は、不平等の現実しか教えてくれません。

にもかかわらず、すべての人間が、いかなる境遇にあらうとも、尊厳においてかけがえのない存在であり、

権利において絶対に平等である、と言えるのは、

経験の世界を越えたところにある

超越的な根拠に基づいているからです。

人間の根源的な平等は、一つの信仰箇条なのです。

係もあったことが知られています。

でも、だからといってこの宣言がまったく無意味な「絵に描いた餅」だったわけではありませぬ。その理念が掲げられていたおかげで、ほんの少しずつですが、不平等は改善されてゆきました。リンカンの「奴隷解放宣言」も、セネカ・フォールズの女性の権利大会も、そしてキング牧師の「わたしには夢がある」という演説も、みなこの宣言を下敷きにしたものです。「理念」には、歴史を動かす力があります。

日本で思い出されるのは、福沢諭吉の言葉でしょう。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という、例の一節です。

人の生まれに貴賤上下の差別はない。それ

なのに、世間に賢愚貧富の違いがあるのは、ひとえに学問のあるなしによるのだ。だからしっかりと勉強しなさい、という「学問のすずめ」です。

さてしかし、ここでもう一度福沢の言葉を読み返してみてください。なぜ彼は、「天は」と言い、「造らず」と言ったのでしょうか。

福沢は、キリスト教の神や創造主への信仰をもっていたわけではありません。いや、彼はただ他人の言葉を引用しているだけだ、と言うこともできるでしょう。たしかに、右の文章の末尾には、「と云へり」と付け加えられています。けれども、ではなぜ彼はそれを引用によって語ったのでしょうか。

それは、「平等」を語るにはどうしても何

らかの信仰が必要だからです。

ジェファソンも福沢も、宗教的な根拠づけなしに平等を語ることはできませんでした。

人間の本質における平等という観念は、いずこにあっても何らかの宗教的な信念に裏打ちされて、はじめて語ることができます。それが歴史形成の駆動力となったのはキリスト教の地盤においてでしたが、同じような思想は原始仏教にもストア哲学にもイスラム教にもあります。

わたしたちの経験は、不平等の現実しか教えてくれませぬ。それにもかかわらず、すべての人間が、いかなる境遇にあらうとも、尊厳においてかけがえのない存在であり、権利において絶対に平等である、と言えるのは、経験の世界を越えたところにある超越的な根拠に基づいているからです。人間の根源的な平等は、一つの信仰箇条なのです。

平等は、現代社会では「法の下での平等」や「権利における平等」として表現され、その超越的な由来はもはやわたしたちの意識にのぼりませぬ。けれども、その根柢には、すべての人が神にかたどって造られた「神の像」であり、キリストがそのために生まれて死んでくださったほどに尊い存在である、という信仰があります。そして、聖書によれば、この「すべての人」には、その神を信じない人々こそが第一に含まれています。